

2021 郷土の歴史探検ツアー

梁川地区ガイドパンフレット

大月市郷土資料館

梁川の由来

明治新政府により地方制度が改められ、1874（明治 7）年に新倉村、塩瀬村、綱の上村、立野村は合併し、梁川村が生まれました。

旧 4 村を流れる桂川のこの辺りには、かつて落ちアユをとるために長い生竹を割り、編んだスタシの築を斜めにかける「築かけ場」がありました。

そこで、「築かけのある川のまわりの地域」ということで、村名を「梁川」にしたといわれています。

① 円通寺の欄間と十王（立野）

慈雲山円通寺は、臨済宗南禅寺派の禅宗寺院で、大永 7（1527）年建立 明海和尚を開山（初代住職）として創建されました。

明治 24（1891）年、立野で大火事がありました。タケダキザンという和尚さんが三間梯を持ち歩いて寺を守ったことが伝えられています。

現在は無住となり、本堂も建替えられましたが、欄間等の彫り物は昔ながらの物を使い、その色彩はこの地方には類のない立派な物です。

また、向かって左の脇間には十王が安置されています。十王とは、冥土(めいど)にいて、亡者の罪の軽重をただす 10 人の判官のことで、没して後、7 日ごとにそれぞれ秦広王（初七日）・初江王（十四日）・宋帝王（二十一日）・五官王（二十八日）・閻魔王（三十五日）・変成王（四十二日）・泰山王（四十九日）の順番で一回ずつ審理を担当します。七回の審理で決まらない場合は、追加の審理が三回、平等王（百ヶ日忌）・都市王（一周忌）・五道転輪王（三回忌）が行われます。

② 道祖神（立野）

道祖神は、災いが域内に入ってこないようにと村の出入り口に守り神として置かれました。

これといって定まった形は無く、丸石や石棒、

石碑、石像など、様々な形状をしています。

やがて、豊作祈願や子孫繁栄への願いが加わり、「双体道祖神」も造られるようになりました。

円通寺東側の東部広域林道の擁壁下にある「双体道祖神」は、新倉有倉神社のそれとともに、とても珍しく、愛好家の中でも有名です。

③ 彦田観音（彦田）

天目山に追い詰められた武田勝頼は、自刃し果てるその日に、優れた名馬であった愛馬の白龍を死なせることを惜しみ、武蔵の領主北条氏へ届けるよう家臣に命じました。

命を受けた家臣の小幡八郎太が白龍を曳いて斧窪まで逃げ延びて一休みしていると、突然白龍が千里に響くかと思うくらいの大きいななきをあげました。

蹄の音さえ忍ばせてここまで落ち延びてきたのに、突然の大きいななきをあげたため、事が明るみに出る事を恐れて、八郎太は白龍の命を絶って彦田山へ埋めました。

翌日、斧窪の里にも勝頼公が自刃したという報せが伝わってきました。村人たちは白龍のあの大きいななきは主人の死を感じ取ったからに違いないとうわさしました。

その後、馬のいななきは聞こえるものの、姿が見えず、それでいて明らかに馬が荒らしたと思われる被害が相次ぎました。また、ある者は「白い馬が空を駆けて行った」、「勝頼公を載せた白馬が江戸道を通っていた」などと言う者もいました。

そこで、村人たちは勝頼の無念さを秘めた馬の霊がこの世をさまよい、崇っているのではないかと思い、白馬を本尊とする馬頭観音堂を建てて彦田観音と名付けて白龍の霊を慰めました。

それ以来、馬の被害はなくなり、かわって不思議なことにカイコの当たりが続くようになりました。

こうして「彦田の観音に参詣すれば養蚕のご利益あらたかである」とうわさが広がるようになり、たくさんの人が参詣に訪れました。

特に祭日には、津久井や八王子の方からも飾り立てた馬がやってきて、信徒一千人というにぎわいを見せたそうです。

いつの頃からか彦田の観音参りには馬のわらぐつを二足携えて参拝し、帰りには観音様に備

えられた別のわらぐつを一足もらいうけて帰るようになりました。

また馬のないものは供えられたわらぐつをお札がわりに求めて帰りました。

このわらぐつを養蚕室へ掛けておくと馬はその年一年は無事、養蚕は必ず当るという霊験も加わり、さらに賑わいが増したそうです。

お堂には尼僧が住み、観音供養を続け、養蚕守護の札を配っていましたが、世の中が大きく変って農村に馬がいなくなり養蚕も衰退してきたので、昭和 30 年位まであったこの行事も白馬の話もいつしか語り草となってしまいました。

（『郡内の民話』内藤恭義（1991 年）なまよみ出版より）

④ 全昌寺（綱本）

『甲斐国志』という江戸時代の地誌によると、全昌寺は、臨済宗鎌倉建長寺派の禅宗寺院で、延命地藏を本尊とし、年代はわかりませんが、拙庵和尚を開山（初代住職）として創建されたとあります。

また、棟札によると、最初は全松寺、次には善松寺、その次は小松山全昌寺、そして現在の龍滝山全昌寺と山号は 2 度、寺号は 3 度変わっています。これは、全松寺、善松寺の頃には小松大明神を合わせて祀る寺だったので松の字を入れた寺号にし、その後小松神社が分離して建造された時に山号を小松明神にちなんで小松山とし、寺号を松の字が重複するので全昌寺と改めたのではないかとされています。昔は、音があっていれば様々な漢字があてられることはよくありました。

また、龍滝山へと山号が改まったのは、綱本の西村滝下にあった十王堂などを合併した 15 代哲舟和尚の時代だと言われています。

⑤ 龍王（倶利伽羅不動）

全昌寺の入口西側のコンクリート造りの祠に安置してある石像は倶利伽羅不動で、倶利伽羅龍が「剣」に巻き付いているその姿から、村人たちは「龍王」とよんでいました。

向かって左側に、享保十八癸丑年十一月の文字が刻まれています。その前年にあたる享保（1732）年には長雨のため冷夏となり大飢饉がおきています。おそらく、この地も桂川や、

綱本の西沢が氾濫し、大きな被害に見舞われたことと思います。荒れ狂う水の流れを龍に見立て、その鎮静を願って、龍王像が造られたと言われています。

⑥ 小松神社（原）

小松神社には、平清盛の嫡男だった重盛の尊骨が納められていると伝えられています。

「梁川のむかし」によると次の通りです。平重盛は、病気で亡くなられいったん大阪へ葬られましたが、壇ノ浦で平氏が滅亡したため、大阪は源氏に占領されてしまいます。そこで重盛に心服していた平貞能は尊骨をこの地に持って来て原部落の険しい岩山の頂上に改葬しました。村の人たちは、その場所を御在所と呼んでいました。文治 2（1186）年 3 月 15 日のことでした。

御在所より現在の小松神社の地に尊骨が移されたのは、文永 10（1274）年 12 月のことでした。その際、小松内大臣平重盛公のものだと言われる打刀一振も奉納されました。

昔、村内の者がこの刀を盗み出し、さやとつばは売り払いどうしたことか刀は小仏峠の茶屋に置き去りになっていました。現在刀だけはていねいにお祀りしてあります。

下原の大火（130 年前）で鳥居が焼けたため、明治 29（1896）年に再建されましたが、神社には、昔のままの立派な彫り物が残されていてその古さを物語っています。

ちなみに、小松神社の名の由来は、京都の八条の北、堀川の西にあった平重盛の邸宅を小松殿とよんだことからきていると思われる。

⑦ 大ぞうり橋（原・塩瀬）と五輪の塔（綱本）

鎌倉幕府を倒す戦いで目覚ましい活躍をした護良親王でしたが、足利尊氏の讒言によって父である後醍醐天皇によって鎌倉に流罪となりました。その後、天皇親政の復活をめざした「建武の新政」はうまくいかず、不満を持った武士たちは鎌倉幕府復活をめざす北条時行を中心に、鎌倉を奪い返すために乱を起こしました。その戦いの中で、足利氏によっ

て護良親王は首を刎ねられましたが、妻の雛鶴姫はお腹の中に子どもを宿しながらもなんとか逃げ延びることができました。

護良親王の首級や雛鶴姫の逃亡について様々な伝説が各地に残っていますが、梁川にも次のような2つの伝説が語り継がれています。

●1つめは「大ぞうり橋」です。

雛鶴姫が逃げ延びる途上でこの地に着いた時には、疲れ果て履き物もボロボロになっていました。原から塩瀬へと丸木橋を渡ろうとした時、川のそばに住んでいたじいさんとばあさんはそんな姫様をふびんに思い、ばあさんは姫のため温かい食事を用意し、じいさんは赤い鼻緒のわら草履を作って差し上げました。よろこんだ姫は足も軽く無事に丸木橋を渡り秋山の方へ向かいました。

高貴なお方がぞうりを履いて渡った橋なので誰いうとなく御々ぞうり橋→大ぞうり橋と呼ぶようになりました。

大ぞうり橋より少し下った所に、大正13年大正橋がかけられ、昭和40年には車も行き来できる塩瀬橋がかけられました。

●2つめは「五輪の塔」です。

姫は寺下峠を越えて秋山の無生野にたどり着きました。そこでお産をしましたが、赤ちゃんはすぐに亡くなってしまい、その亡骸は綱本に葬られ、五輪の塔が建てられたということです。

⑧ 亀伯山瑞瀧寺（臨濟宗）の由来（中野）

昔、塩瀬には無量寺（今のお宮の少し手前）という京都の南禅寺を本山とするお寺がありました。本山より何人ものお坊さんが寺の住職としてきましたが、托鉢に出ては、行方不明となり帰ってきませんでした。お坊さんに問答ということがあり、問答に負けるとその地にいられなかったのです。

そこで、特別に修行を積んだ智源禅師が派遣されてきました。ある晩のこと、その夢枕に白髪の老翁が立ち、「この寺はこの場所では栄えない。私が案内するからついてくるように」と言われました。和尚さんはその後をついていったところ、「イドイリ」という泉の淵の橋の所まで来ると、「イドイリの水を引き入れて寺を建てたなら、水が涸れるまで栄えるだろう。ここに寺を建てなさい。私はこの泉の主である」と白髪

の老翁は言い、白い亀となって水中に消えてしまいました。

寺は現在の所に建てられ、その名も亀伯山瑞瀧寺とされました。その昔は同じ場所に白山妙理神社、牛頭天王、薬師堂、愛宕堂も祀られていました。神仏分離により神社はすぐ前に寺と向かい合いに建てられています。

明治 35（1902）年、塩瀬の大火の際、立派な寺は焼けました。それでも御本尊だけは持ち出し、その古さをしのばせています。

⑨ 薬師堂（新倉）

『北都留郡誌』によると、かつて新倉の字カシヤに、不動明王を本尊とする真言宗高野派の寶泉寺（ほうせんじ）があったと記載されています。

また、『甲斐国志』にも、不動明王を本尊とする真言宗の寺で、寛文元（1661）年に火災にあい旧記や過去帳が消失したために開山したのが誰なのかわからないとの記載があります。

これに続けて、寺内に山王権現、牛頭天王、天神社、薬師堂、十王堂があったとあるので、この薬師堂に納められている十王像や他の仏像は寶泉寺のものかもしれません。

⑩ 有倉神社の双体道祖神（新倉）

『北都留郡誌』には、「祭神 大物主命」、「或は大永五年（1525年）創建せりとも伝ふ」とあり、続けて、明和3（1767）年再営、明治10（1877年）年10月11日大風によって破壊されたと記されています。現在の鞘堂は平成12（2000）年に新築されました。

境内への入口にある鳥居の右わきには、男女が仲睦まじく体を寄せ合う姿が彫られた双体道祖神があります。

地域の人の話によると、江戸時代のいつ頃かはわかりませんが、どこからか駆け落ちをしてきた若い男女がこの地で息絶えたので、二人のめい福を祈るとともに、夫婦円満・縁結びの神として祀っているそうです。

近くの石灯籠と、この道祖神には、ともに延享4（1748）年と刻まれています

⑪ 桂川清流センター

富士吉田市・西桂町・都留市・大月市・上野原市の5市町の汚れた水をまとめて終末処理する下水処理所として2004（平成16）年に完成しました。

桂川清流センターは下水道の心臓部にあたり、何回にもわたる沈殿の工程によってゴミや土砂を取り除いてきれいな処理水にしていきます。消毒してきれいになった水は桂川に放流され、のちに神奈川県の人々の生活用水として使われています。

山梨県章中心に、5市町章が入る污水管マンホール蓋を見つけてみましょう。

⑫ 大月市ふれあい農園

大月市ふれあい農園梁川は、遊休農地を活用して整備した施設で、敷地面積は約18,400㎡（うち農地面積は約7,700㎡）。農業に興味のある方へ土と親しむ場を提供するとともに、農園にすることで農地や環境の荒廃化を防ぎ、また、農業者との交流や農業への理解を図るなどを目的に、平成5年12月に開園しました。

貸付農地は175区画あり、1区画あたりの貸付農地面積は40㎡で、年間使用料は市内在住者が8,000円で市外在住者は10,000円。管理棟には休憩室、賄い場、シャワー、トイレ、農機具庫塔が整備されています。利用申込は大月市役所産業建設部産業観光課(大月桃太郎課)農林業担当まで。

⑬ 塩瀬下原遺跡

桂川流域下水道終末処理場建設に伴って平成7年度から4年に渡って行われた発掘調査で、縄文時代中期末から後期（今から約4,000～3,500年前）を中心とした集落跡が発見されました。この遺跡からは、敷石住居跡や土坑・集石・配石などの石を使った遺構がたくさん見つかりました。なかでも、第4次調査で発見された敷石住居跡（しきいしじゅうきょあと）は、直径約7mの大きさと炉を中心に十字型に敷石が配置されるという特徴的なものでした。

⑭ 六地藏様（原）

1704（宝永元）年、郡内は大飢饉に見舞われ、食べるものもない有様でしたが、きめられた年貢は収めなければなりませんでした。

なんとか年貢をゆるしてもらおうと郡内各地の代表6人が谷村の代官所へ申し立てに行ったところ、申し立てが聞き入れられないばかりか都留市高尾公園金井河原で処刑され帰らぬ人となってしまいました。

なげき悲しんだ梁川の村人は供養のために六体の地藏様を作り、堂の中へお祀りしていましたがその後、堂は大火で焼け、雨ざらしになってしまいました。

そのうちお地藏様を子供たちがいたずらし近くの下井戸へ投げ込んでしまいました。

明治41年に上条義基さんが現在の碑を建て、毎年、4月15日になるとお酒やお菓子を供えお祀りをしていたそうです。

⑮ 道しるべ（原）

梁川支所から自然学園高校への道と、綱本から原へ登って来る道が交わる、畑の中の小さな十字路に高さ60cmあまりの石があります。

石には「左 江戸道」と刻まれていることから、江戸時代の道標であったことがわかります。

江戸時代、梁川は甲州街道から外れていましたが、江戸への道が通じていました。下鳥沢から桂川北岸沿いに斧窪、彦田を通り、綱本へ下り、再び原へ上り、新倉へと抜ける古道です。

山坂の多い本道にくらべて、桂川に沿う間道の方が距離も短く通行も楽であるところから、地域の人々の生活道として、また正規の街道を通ることを避ける人たちがこの道を歩きました。

※主要参考資料

- 『梁川のむかし』（梁川高齢者教室 1978）
- 『山紫水明』（梁川町の活性化を考える会 2007）
- 『郡内の民話』（内藤恭義 1991 なまよみ出版）
- 『甲斐国志』（1814）
- 『北都留郡誌』（1925）
- ・大月市HP
- ・山梨県HP